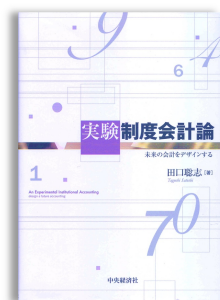


【書評】



『実験制度会計論－未来の会計をデザインする』

田口 聡志 著

株式会社中央経済社

平成27年3月31日刊

A5判・本体価格3,400円＋税

会計制度を取り巻く環境は、近年大きく変化している。会計制度の有用性は事後的に検証されるものであるが、本書では、モデル（ゲーム理論）を用いて問題点を抽象化し、それを実験により分析すれば、その有用性や意図せざる帰結を事前にも検証可能なことを示している。筆者は会計制度をめぐる問題の本質は、「選択」と「人間のこころ（意図）」にあるととらえ、制度会計が喫緊に解決すべき課題として、会計基準のコンバージェンス及び会計不正の問題を取り上げている。そして、実験という手法は、前提やデータ環境を自由にハンドリングできることから事前検証できるという強みがあり、また、ゲーム理論は、プレイヤーの行動やそのインセンティブ構造の分析を得意とするため、実験制度会計論は未来志向性を有すると述べている。

本書は2部（全8章）及び終章で構成されている。

第Ⅰ部「制度を選ぶ」（第1章～第3章）では、会計基準選択を各国の意思決定問題として抽象化し、コンバージェンスの今後の行方を予測している。筆者の分析によると、各国の会計基準とIFRSの品質が同等の場合、IFRSへのコンバージェンスは成立しない。一方で、IFRSだけが唯一高品質な会計基準であるという条件を加える場合、モデル分析上はIFRSへのコンバージェンスが成立する結論と、全ての国が何もしない（コンバージェンスしない）という結論が均衡するものの、実験による検証では、コンバージェンスが成立しない可能性が高くなる。そしてこの結果を受け、コンバージェンスを安定的に進める方策について分析したところ、コンバージェンスを成立させるためには、会計基準の多様性（ダイバージェンス）を事前のルールに織り込まなければいけないという逆説的な結果が示されている。

第Ⅱ部「こころと制度」（第4章～第8章）では、会計不正や制度の失敗の原因は、複数人の間の相互依存的な意思決定環境における人間の「意図」にあるととらえ、コーポレート・ガバナンス規制の意味やあり方を分析している。会計の記録行為により経営者と株主の間に信頼関係が生まれるならば、不正を防止する大掛かりな規制はそもそもいらぬのではないかという疑問が生まれる。しかし筆者の分析や実験によると、倫理規定は一律に強制すると良い結果は生まず、また、内部統制監査は、当該制度の存在が逆に監査リスクを高めるという結果を示している。つまり、例えば、内部統制監査制度により不誠実な経営者も内部統制の強度を上げるため、経営者のタイプを見分けることが困難になるという。

このように、課題の解決を会計処理や制度そのものの規範性に求めず、個々の局面におけ

る利害関係者の選択やそこに登場する人間のところに求めるというアイディアは斬新である。会計監査にまつわる身近な問題が既存の議論とは異なる視点で具体的に分析されている点がユニークであり、新しい分野に対する筆者の強い意欲が伝わってくる。

以上のことから、協会学術賞に値するものとして選定した。

著者の略歴

田口 聡志 (たぐち さとし)

昭和49年 千葉県生まれ

平成12年 慶應義塾大学大学院商学研究科前期博士課程修了

平成13年 慶應義塾大学商学部助手 (有期)

平成15年 新日本監査法人 (現新日本有限責任監査法人)、財団法人地球産業文化研究所客員研究員

平成16年 慶應義塾大学大学院商学研究科後期博士課程修了、多摩大学経営情報学部助教授

平成19年 同志社大学商学部准教授

平成25年 同志社大学商学部教授

現 在 同志社大学大学院商学研究科教授

【主な著書】

- ・デリバティブ会計の論理 (単著)
- ・会計学を学ぶ (共著)
- ・国際会計基準を学ぶ (共著)
- ・監査役のための早わかりシリーズ (共著)
- ・心理会計学 (監訳書)
- ・Economic Consequences of Global Accounting Convergence: An Experimental Study of a Coordination Game (共著)